

治療報告書

平成 20 年 11 月 26 日

- < 樹木名 > サクラ
- < 樹種 > ソメイヨシノ
- < 管理者 > 交野市
- < 所有者 > 交野市
- < 所在地 > 大阪府交野市私部公園地内
- < 治療期間 > 平成 20 年 11 月 23 日 (土) ~ 11 月 24 日 (日)

■ 状 況 ■

平成 20 年度樹医養成セミナー 1 級の最終講座、生木治療実習として与えられた 1 本。数十年前に市が本公園の桜並木として植えたもののようである。桜は三面コンクリート張りの川とコンクリート敷きのサイクリングロードに挟まれた、約 2.3m 幅の帯状の土部分に、約 3 m 間隔で密植されている。場所によっては地上から 2 m 付近で樹冠が隣の樹と重なっている。さらに枝同士は内側に著しく絡み合っており、枝擦れにより傷も発生している。主幹の先端部は枯れていて手で簡単に折れた。続く胴には縦 8cm・横 4cm の穴が開いているほか、無数にある大小の瘤や洞、縦に走る線状の膨らみは蟻の棲家の証である。胴吹きも多い。その他、南東の枝が一本、樹姿より極端に伸びている。治療を始めてから解かった事として、主幹の木部はほとんどが白色腐朽菌に侵されており、下から上に伸びる不定根が多数発生していた。

■ 原 因 ■

1. 植えた間隔が狭すぎたため、伸びた枝が隣の樹の枝と重なり、風が吹くたびに枝が擦れる。枝葉が擦れる場所は成長抑制物質が分泌されるので、樹木は（そのストレスから）別の場所に枝葉を広げ光合成生産物または根とのバランスを保とうとする。それが内側にあった枝を発達させたり、新たに枝を発生させたりして、タコの足が内側に絡み合ったような、奇妙な枝ぶりにさせた。
2. 上記 1. のようなことは本来、普通にあることだが、幼樹のうちに将来を見越した剪定をしなかったため。
3. 本来の主幹が腐朽や昆虫の穿孔により著しく痛んだため、危機を感じた桜が別の枝に養分を送り込み、一つの枝だけ極端に長い枝となった。
4. 幼樹の頃、下刈りなどの際に幹を傷つけるようなでき事があり、そこから腐朽菌が入り込んだのではないかと（予想）。
5. わずか 2.3m 幅間の土壌では根を十分に張ることができず、土の中は根で一杯になっている可能性がある。根が弱っているため十分なフィトンチッドを放出させることができず、腐朽菌や蟻の発生を食い止められなかったのではないかと（予想）。

■ 治 療 ■

1. 樹姿より極端に伸びた枝 D を深めに切る。
2. 枝 B を根元よりカット。主幹 C は、C1 と C2 を伐り、C3 と C4 を残す予定だったが、木部の腐朽が激しすぎたため、最終的に A と D の分岐点からカット。
3. 胴吹き、内側に伸びている枝は全てカット。
4. 穴の中を掃除し、瘤や洞、膨大部を削ると大量の蟻の存在と木部の腐朽を確認。さらに柔らかくなった木部中心付近に多数の不定根を確認。これら病害虫に侵された部分をできる限り削り取る。
5. 伐った部分、削った部分全てにカールコートを塗布。
6. 腐朽部にペンレートとデスの 10 倍液を塗布または流し入れ、十分に染み込ませる。
7. 腐朽部を削ってできた 3 つの穴を閉塞処理。最大のはラス網と鉄筋使用。中位のは鉄筋使わず。最小のものはセメントで塞ぐのみ。最後に各セメントを着色し、擬木仕上げをする。

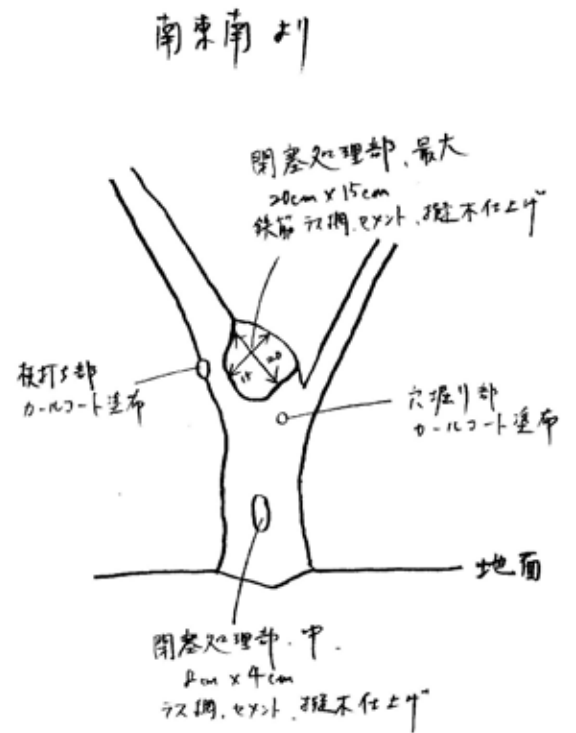
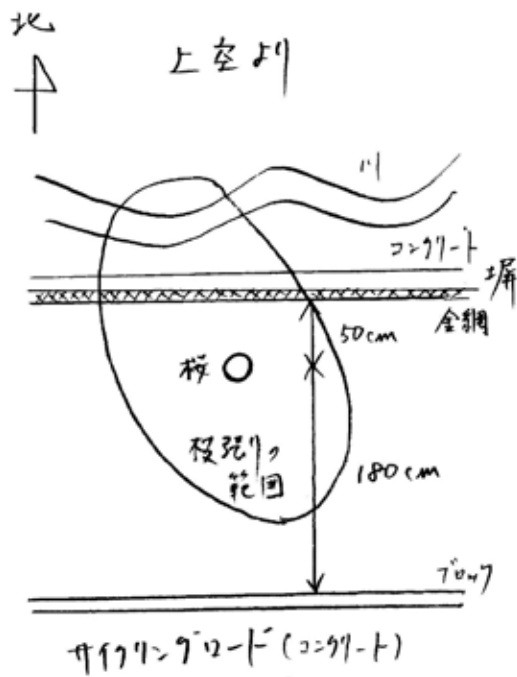
測定

幹周 約 30.8cm

樹高 約 3 m (治療前 6 m)

葉張り 東西約 1 m、南北約 2 m (治療前東西 1.5 m、南北 2.5 m)

現況図



■ 管 理 ■

《短期集中して行う点》

- ・外科的治療や枝打ちをしたところの形成層発育が、来春速やかに行われるよう、または休眠芽が大きく育つように、十分に肥料を与えること（毎年与える）。

《中・長期的に行う点》

- ・毎年冬期に、将来的に重なってしまうであろう枝を剪定し、切った部分は塗布剤や墨汁を塗ること。
- ・今回の治療は十分ではないので、数年後、枝葉の量が増えてから樹勢を見て、閉塞部をいったん取り壊し、もう一度腐朽部の除去を完全に行い、再治療をすること。

■ 考 察 ■

（課題の樹は、セミナーの定められた時間の中では、十分な治療をすることは難しい樹だったと思います。またこのような実習の現場では、「まずはやってみる」ことが大事だと思うのですが、「とりあえず疑ってみて、否定できる要素があるうちは動かない」というチームであったため、感情移入して議論すると何もせずに終わってしまうので、当方しらけながら進めさせていただきました。そのせいで最も大事な部分である、「樹に対して愛情を持って治療を行う」ことは、できませんでした。だからきっと、あまり良くならないと思います（手は抜いていませんが）。なんとも心残りの治療となりました。しかし樹医として本当に活動していくと、野次馬や冷やかしかはおろか、どうにかして阻止しようとする者も出てくるでしょうし、こんなことはざらにあるだろうなど、今気づきながら書いています。）

《治療依頼者（交野市）に報告書を提出するような文面の場合》

この桜並木は植栽後、早いうちから将来を想定した剪定、枝打ちを行って来なかった事によって、桜同士が押し蔵饅頭をし、異様な樹形と病虫害の温床となってしまっています。今すぐにやるべきことは、この桜並木の未来予定図を画くことです。完成させるのは10年後なのか、それとももっと先なのか、そしてどんな桜並木にするのか、それをお決め下さい。今回のような治療方法は短期的な、一次しのぎ的な治療法です。数年のうちに隣の樹同士が空を取り合って枝をぶつけるのは目に見えています。このような場合、衰弱の激しい樹は思い切って根元から伐ってしまい、両側の桜が枝葉を十分に広げることができるようにしてやることも必要です。さらにもっと先のことを考えるなら、このまま桜たちが大きくなると、花見に来た見物人が、横に張り出した枝が邪魔で往来できなくなってしまいます。主幹がすらっと2m位真っ直ぐ伸びているような桜並木にしようと思ったら、間引く本数を多くする必要がありますし、樹医としての治療方法、仕立て方も変わってきます。もちろん、間引くのではなく、どこか移植する場所を用意してくださるのでしたら、樹医として望外の喜びとするところです。その方が、残す樹ももっと大きく根を張ることができ、長生きして大木になり、立派な桜並木になることでしょう。

今の状態は、人間が小さく仕立てた、盆栽風の桜並木です。もし“わびさび”の効いた桜並木として名物通りにしていただければ、それはそれで、桜たちも少しは延命になりましたし、地球生命を共に生きてきた兄弟である私達人間が気にかけてくれるのですから悪い気はしないでしょう。しかし、治療としては中途半端であり、桜は満足してはいません。桜たちはもっと大きく、伸び伸びと枝葉を広げたがっているのです。私たちにはその声が聞こえてきます。

現状の治療法のままだでも、当協会の生木治療実習として大いに活用させていただきます。しかしこの先、枝打ちが必要になったり、病虫害が蔓延したり、施肥が必要だったりして、結局細々とした費用がかかってしまうことでしょう。この際、思い切って大きな予算取りをしていただいた方が、長い目で見た場合得策と思われるかもしれません。何とぞご賢察の上、ご検討くださいますようお願い申し上げます。

敬具

作成者 木村 道紘

■ 写 真 (1) ■



治療前



治療後（データ欠損のためこの写真を使用）

■ 写 真 (2) ■

◇治療 1. 樹姿より極端に伸びた枝 D を深めに切る。



治療前

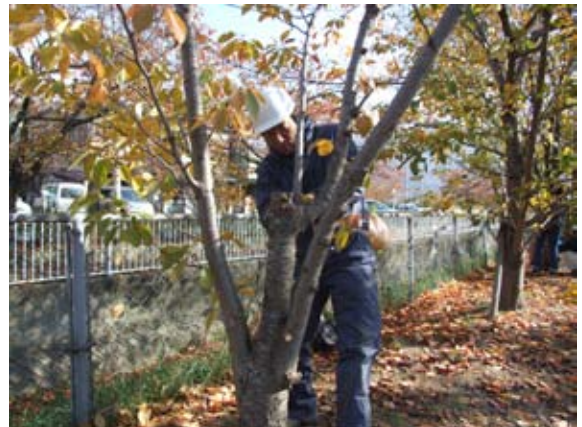


治療中 (治療後データ欠損)

◇治療 2. 枝 B を根元よりカット。主幹 C は、C1 と C2 を伐り、C3 と C4 を残す予定だったが、木部の腐朽が激しすぎたため、最終的に A と D の分岐点からカット。



治療前



治療中



治療中



治療後

■ 写真 (3) ■

◇治療3. 胴吹き、内側に伸びている枝は全てカット。



治療中



治療後

◇治療4. 穴の中を掃除し、瘤や洞、膨大部を削ると大量の蟻の存在と木部の腐朽を確認。さらに柔らかくなった木部中心付近に多数の不定根を確認。これら病害虫に侵された部分をできる限り削り取る。



治療前



治療中



治療中



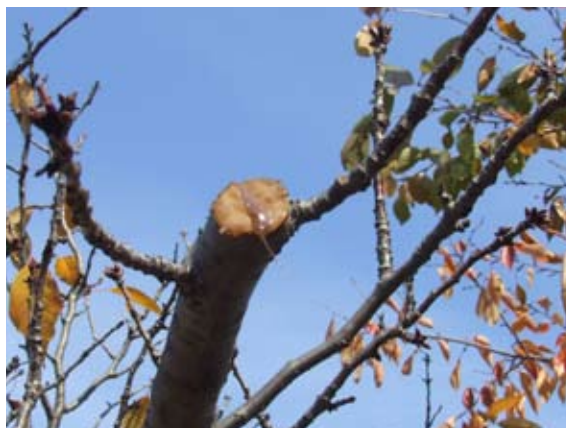
治療後

■ 写 真 (4) ■

◇治療 5. 伐った部分、削った部分全てにカーコートを塗布。



治療中



治療後

◇治療 6. 腐朽部にベンレートとデスの 10 倍液を塗布または流し入れ、十分に染み込ませる。



治療前



治療中 (薬剤作成中)



治療中



治療後

■ 写真 (5) ■

◇治療7. 腐朽部を削ってできた3つの穴を閉塞処理。最大のものにはラス網と鉄筋使用。中位のものには鉄筋使わず。最小のものにはセメントで塞ぐのみ。最後に各セメントを着色し、擬木仕上げをする。



治療前



治療中



治療中



治療中



治療中



治療後

■ 付 録 ■

◇幹枝の名称（北西北より撮影）

